誰もが抱える悩みをパパッと解決！

福田貴一先生の福が来るアドバイス

低学年からの学習習慣がポイント！家庭で育くむ子どもの力

早稲田アカデミー
千葉ブロック統括責任者
新浦安校 校長　福田 貴一

高学年になってからしっかりと学力を伸ばすためには、読解力や語い力、表現力、そして、難しい問題でも自分で考えることのできる思考力など、それぞれ基礎力が絶対に必要です。では、この基礎力はどのようにすればすれば身につけさせることができるのでしょうか。その秘密は、子どもたちが普段過ごしている生活のなかに隠されています。

子どものモチベーションを高めるにはおとなと子どもの感覚の違いを知ることが必要です！

子どもたちがどんな風に考え、何を思っているのかを知ることが、子どもたちの力を伸ばし、さらには、中学受験に対するモチベーションを高める第一歩です。では、どうすれば子どもの感覚を理解できるのでしょうか。おとなの感覚との違いを考えてみましょう。

ほめることで子どもを伸ばす

私たちおとなは、何か失敗したり、他人から注意されたりすることで、「次は同じ過ちを繰り返さないでおこう」と考えます。一方、子どもは何度叱られても同じ過ちを繰り返し、たとえ泣いて謝ったとしても、泣き止むと同時に叱られたことそのものを忘れてしまうようです。喉元過ぎれば熱さを忘れる―、まさに子どもたちのためにある言葉です。

では、子どもたちは、どんなときに「もっと頑張ろう」と思うのでしょうか。それは、先生やお父様、お母様など、おとなにほめられたときです。当然ながらほめられればうれしいので、もう一度ほめてもらうために同じことを繰り返します。ということは、子どもに勉強させたいならば、「勉強しなさい！」と叱るよりも、「自分から勉強しているなんてえらいね」とほめればいいのです。

このようにほめることで子どもの能力を伸ばすことを"ピグマリオン効果"といい、4年生くらいまでの子どもに対しては、かなり効果が期待できると言われています。

子どもとおとなでは時間感覚が違う!?

「受験まで1年」と聞いたとき、ほとんどのお父様、お母様は「もう1年しかない」と思われるでしょう。しかし、子どもたちは同じ言葉を聞きながら、「まだ1年ある」と考えるようです。

これは、おとなと子どもとの時間に対する感覚の違いが原因です。たとえば、40歳のおとなと10歳の子どもの場合、10歳の子どもにとっての1年は人生の10分の1になりますが、40歳のおとなにとっての1年は、人生の40分の1でしかありません。つまり、40歳のお父様やお母様と10歳の子どもでは、1年に対する感覚が4倍も違うのです。これは、お父様やお母様が「あと4年」と聞いたときに、「まだ先」と思うのと同じです。

そんな子どもたちに、時間的なプレッシャーをかけようと思えば、言葉の選び方に工夫が必要です。たとえば、小学校5年生の1月、受験まで1年になった子どもに、「来年は受験だから」と声をかけても、「来年」という言葉で「まだ1年ある」と考えるために、それほど切迫感は生まれません。しかし、「今年は受験生だね」と声をかけると、「もう受験生なの？」という驚きと共に、「今から受験生だ」と気持ちの切り替えができるはずです。

ただし、子どもによって言葉の捉え方は異なりますので「うちの子ならば…」と、いろいろと工夫して声がけをしてみてください。

「やるべきこと」と「やりたいこと」

たとえ「やりたいこと」があったとしても、「やるべきこと」があればそれを先に終わらせる、この物事の優先順位を守ろうとするのがおとなです。子どもの場合は、宿題があっても友だちが誘いに来れば遊びに出かける、見たいテレビ番組が始まれば宿題の手が止まるなど、やりたいことから先にする傾向にあります。これも、おとなと子どもの感覚が違うことにより生じます。

では、遊びたがっている子どもに、「遊びに行きたいならば、宿題を終えてからにしなさい」とお友達の誘いを断らせ、先に宿題をさせたらどうなるでしょうか。おそらく、ほとんど頭に入らないと思います。これは、学年が下になるほど、やりたいことを我慢しながら集中するのは不可能だからです。反対に、「遊びに行ってもいいけど、帰ったら宿題をするのよ」と約束させて送りだすとどうでしょうか。この場合は、「遊びたい」という気持ちが満足するので、帰宅後は「やるべきこと＝宿題」に集中できるはずです。このように、「やるべきこと」を「やりたいこと」と「やりたいこと」の間にお父様やお母様がペースメーカーになって挟み込ませる―。これが、低学年までの有効な勉強のさせ方です。

ただし、「やりたいこと」からさせるのは低学年までのこと。4年生くらいからは我慢させる割合を増やし、少しずつ自分で優先順位がつけられるように導きましょう。というのも、いざ中学受験に向かって走り出したとき、自分で優先順位がつけられなければ、必ず失速してしまうからです。「希望中学に合格」という大きな夢をかなえるには、「やりたいこと」を我慢してでも「やるべきこと」をする。これは当然の心構えだと考えてください。

「わかる」と「できる」の違い

保護者の方から「授業がわかってないようです」とご相談を受けることがあります。その理由を聞くと、大半が「塾の宿題が解けないから」と答えられます。

「宿題ができないからわかっていない」、この考えは間違いです。実際、どんなに塾の授業が理解できたとしても、中学受験指導を行っている塾が出す算数の宿題を、4年生で完ぺきに解ける子はいません。これは、中学受験の問題がそのように作られているからです。

まずは、「授業がわかる」ということと「宿題が解ける」「テストで高得点が取れる」などの、「できる」ということは全く違うものだと考えるようにしてください。

といっても、なかには本当にわかっていない子どももいます。「塾の授業がわからない」「何をしていいかわからない」「これは子どもからのSOSです。絶対に聞き逃さないようにしましょう。

経験することで作り上げる"知識のタンス"

おとなは、「わかる」と「できる」の距離が近いので、初めてのことでも理解さえすればすぐにできるようになります。その理由は、おとなの頭のなかには、子どものころから作り上げてきた"知識のタンス"がありあり、しかも、その引き出しには知識を整理するための仕切りまであります。そのため、たとえ初めての経験だったとしても、類似した経験で作った引き出しから、知識を引き出すことができるので、ある程度わかればできるようになるのです。

しかし、子どもの"知識のタンス"は未完成で、4年生くらいまでは"知識のタンス"を大きくしているところです。当然ながら引き出しの数や仕切りは不十分。でも、引き出しの大きさは無限大…。そこへ算数も理科も社会も国語も「緒に「わかったこと」を詰め込んでいくので、いざ、知識を使おうと思っても、どこにあるのかがわからない―。これが、「わかっていたのにできない」ことの原因です。

"知識のタンス"を整理整頓すれば「わかる」と「できる」が近くなる！

"知識のタンス"から知識を引き出すには、引き出しを作り、仕切りを入れるなど、知識の整理が必要です。その一番の方法が、何度も同じような問題を解かせることです。繰り返し問題を解くことで、次第に知識が整理され、やがて問題を読んだだけで、「これは○○算だから、△△図を書けばわかる」と"知識のタンス"から解き方が引き出せるようになるのです。その結果、塾の授業で理解したことならば、宿題に出ても解ける、すなわち、「入試でも解ける」となるのです。

おとなたちは、つい、自分たちが通ってきたはずの子ども時代を忘れてしまいがちです。しかし、子どもたちの力を伸ばしたいと思うのであれば、おとなと子どもの感覚には違いがあることをきちんと理解したうえで、子どもの成長にあったアドバイスを心がけてください。そうすれば、必ず、中学受験を勝ち抜く知識と精神力がはぐくまれるはずです。

お便りをお待ちしております
みなさまのお悩みに福田先生が紙面上でお答えします。
下記のアドレスまでお寄せください。
メール：success12@shahyo.com
採用された方には、オリジナル福スタンプを差し上げます。